

枕飯と枕団子

—— 葬送儀礼における雑神への施食 ——

田 中 宣 一

はじめに

祭りは、人々がそれぞれの願いをかなえたり心の安定をはかるために、神を迎えて供饌侍座し、靈力を得るなどの神との交流をとおして目的を達成しようとする行為であるが、祭りの場に立ち現われると考えられているのは、積極的に祀ろうとする神だけではない。現在これを強く意識しているかいはなかは別として、祭りには、歓迎されざるさまざまな神が祀りを乞うて同時に群集すると考えられているのである。ここで神という場合には、特定の名称を付与された神道上の神のみではなく、超人間・超自然のあらゆる靈的存在を指しているのだが、それぞれの祭りにおいて、積極的に祀ろうとす

る対象を主神、祀りを乞うて勝手に寄り集まってくるとみなされている霊格集合体を雑神と呼ぶことにしたい。雑神は煩わしい迷惑な存在ではあるが、祀りを恙なく成就させるためには無視することができないと考えられており、筆者はつねづね、祭りの研究は、主神への祀りについてのみでなく、この雑神の存在をも念頭においてなされなければならないと主張しているのである。⁽¹⁾

葬送儀礼を祭りの範疇に含めることには異論も多いであろうが、葬送儀礼が、何にもまして霊的な存在を意識して執り行われるものであることは間違いない。死者への愛慕の念が強く表出される場合であろうと、死霊を恐れそれを忌避しようとしてなされる儀礼であろうと、葬送儀礼の中心にはいまでもなく死者の霊がある。これを主神とすれば、葬送儀礼には、カシヤ(火車)・ネコマタ(猫又)を代表とするさまざまな雑神の存在も無視できない。かつて土葬した周囲を簡単に割竹で囲い、各地で狼ハジキ・眼ハジキ等と呼んでいる設けも、要するに邪霊の侵入を阻止しようとするためであり、各所に雑神の存在が観念されているわけである。⁽²⁾

死体へのカシヤ・ネコマタの類の侵入を恐れて、死者の枕元に金物を置いたり、埋葬地周辺を狼ハジキ竹等で囲むのは、あくまで雑神防禦の手段であつて祀っていることにはならないかもしれないが、とにかく雑神を侮りこれへの対処を怠ると死者の霊への対応に支障が生ずると考えられて、慎重に執り行われているわけである。従来の葬送儀礼研究では、死の持つ由々しき事態の特性からか、雑神への対処をこのような呪的作り物を設けての防遏の視点から捉えてきた。そして一定の成果を収めてき

たのであるが、雑神への対処の仕方は、実はそれだけではなかったのである。

・小稿では主として、死後の早い時期に死者の枕元に置かれる枕飯・枕団子と総称される食品の意味の検討をおして、葬送儀礼におけるもうひとつの雑神への対処法をみてみたい。そして、主神の祀りを成立させるためにはまず雑神への供饌がなされなければならないという日本の祭りの構造が、葬送儀礼のなかにもうかがえるのだということ述べてみたい。

一、枕飯——魂呼びい説と鎮魂説

臨終の際には、さまざまな魂呼びいの説法を試みて肉体から分離していったと思われる靈魂の復帰を祈るが、それがかなわぬ願いだと悟り厳肅に死を確認せざるをえなくなると、死者を北枕にして寝させ、顔を晒木綿などで覆う。そして、枕元もしくは身体の上に短刀など金物を置き、一本花を供えたり線香を燻らせたりし、なるべく早く一膳飯を炊いたり団子をこしらえて枕元に供える。殯の習俗にまで言及するときはないが、これが近代のわが国各地の死者に対する死直後のほぼ共通の作法であった。このうち多くの作法は近世やそれ以前にも行われていたであろうし、また、魂呼びいの説法を除けば、病院等の施設で死が確認され葬儀屋の介在が多くなった現代においても、死者がいったん家に戻れば同じ作法がほぼ継承されているのではないだろうか。ただ、小稿で問題にする枕元に供え

る飯や団子は、供えることは供えても、現代では準備のしかたに大きな変化がみられるかもしれないが。

枕元に供える飯や団子はマクラメシ（枕飯）・マクラダング（枕団子）と呼ばれることが多く、枕飯・枕団子は研究上の術語としても定着している。しかしなお各地では、イッパイメシ（一杯飯）・ジキノメシ（直きの飯カ）・ハヤオゴク（早御供）・ゲダキノママ（外炊きの飯カ）・ユウゴメシ（霊供飯カ）・シニベントウ（死弁当）・イッパダング（一杯団子）・ハヤダング（早団子）・ナマダング（生団子）等々、さまざまな呼びかたがなされており、これらの名称はそのまま、枕飯・枕団子の性格が反映したものだといえよう。

枕飯・枕団子には、作りかた・形状等にさまざまな特徴がみられる。

まず、作りかたであるが、死後ただちに用意しなければならないと考えられており、このことは全国ほぼ共通している。早御供・直きの飯・早団子はこの表現であるが、なぜ急がなければならないかというと、死霊は死後すぐ善光寺詣りをするので、帰るまでに作っておかねばならないとか、その弁当として間にあわせねばならないからだという。近畿地方で熊野那智の妙法山へ行くという伝承が多いように、善光寺以外へ行くという例もあるが、とにかくどこかの霊場へ行くから早く用意しなければならぬのだというのである。死弁当というのは、このときの弁当だということを強調した名称である。帰るまでに準備するのか弁当として作るのか両方の伝承があるが、とにかく急がねばならない

という点では共通し、だから精白しない玄米のままを用いてもよいとか、米をとがないでよいとか、炊き上がりが不出来でもよいとかというように、作りかたが粗末でも仕方がないとも考えられている。生団子というのは、急いでいるから蒸さない生のままの団子でもかまわないとの意である。また、忌火の思想とも関連するが、戸外に特殊な別籠を設けてこの飯・団子をこしらえるのも一般的である。ただ、作るのが葬家身内の女性に限るとか、逆に身内以外の女性であるとかというように地域によって全く異なっているのは、もう忌意識が混乱しているからであろう。

このような作りかたは枕飯・枕団子ともにほぼ共通しているが、形状は当然異なっている。枕飯は茶碗に高々と一杯盛りきりにし、箸一本（もしくは二本）を立てた形が多い。枕団子は丸いのを四個とか十六個・四十九個など数の上でもさまざまであり、丸形でなく平たいのもまれにみられる。

死後ただちにこしらえるというだけでその理由を特に説かない例も少なくないが、理由を述べる場合には、先に述べた善光寺をはじめとする霊場参り云々に関連づけたものが圧倒的に多い。善光寺参り云々について、五来重は、さまざまな遊行聖が各地に『善光寺縁起』に基づく善光寺如来信仰を弘布する過程で、善光寺の授与する御印文やお手判・お血脈が地獄堕ちを防ぎ極楽往生の叶う呪符であるとの信仰が人々の間に定着したため、あの世からの迎えが到着するまでの短時間に、未受納の死者の霊は何をおいても善光寺に参ってこれらを受けて来るはずだという考えが広まったからであろうと述べている（したがって生前に受納を果たしている死者に対しては枕飯は特に急がれていない）。他の霊場参

り云々にも類似的の発生要因が付着しているのであるが、要するに善光寺参り云々は、枕飯・枕団子をただちにこしらえることに関する、善光寺信仰受容者たちの合理解だつたのである。したがって、死後ただちに枕飯・枕団子を用意しなければならないという伝承の本来の理由は、他に求められなければならない。これについては、現在、主として井之口章次と五来重の両説がある。

井之口説は、魂呼びい説というべきものである。単なる供物とみられがちな常識に対して、次のように自説を主張している。

死んでしまった脱け殻に飯を供えてみたところで意味がない。枕飯は食べ物でありながら、呪術的な色彩の濃いものであり、しかもその呪術の目的は死者を蘇らせることであつたと考えられる。人の死後、取るものも取りあえず急いで炊く理由も、そのためにほかならないのである。そして今日の墓地が、もともと死者の復活の殯の場所である限り、枕飯はそのまま墓地へ運ばれるのが本筋で、(中略)すなわち枕飯を供えることは魂呼びのための呪法の一つであつたのに、早くその真意が忘れられたために、さまざまな分化現象を生じた。善光寺参りの俗説は、霊魂が遊離しうるものであるということが理解できなくなつてから、つまり息を引き取つた時には、その人の霊魂がそこにはないということが忘れられてから、一度出て行つたものを改めて迎えるのだと解釈したためであり、枕飯の処置法が区々にして、一定しないのも、枕飯による魂呼びの効果を、信ずる人がなくなつて久しい故であろうと考へるのである。

右の説明は、ほとんどの日本人にとって死とは肉体と靈魂が分離しきつた状態だと考えられてきたという日本民俗学の定説を前提にし、分離の直後ならばまだ何とか再び肉体に靈魂を呼び戻せるのではないかとして行われる魂呼び（魂呼びも同じ）の呪法の一つとして、死者の枕元に枕飯（枕団子も含めて）が供せられるのだ、急がなければならぬのはそのためなのだ、というのである。飯や団子になぜ魂を呼び戻す呪力があると考えられていたのかというと、ここでは述べられていないが、柳田国男が説く米の靈力への信念が、人々にこの呪法を信じさせてきたのだと井之口は考えるわけである。⁽⁶⁾善光寺参りの解釈が理解困難であるとはいえ、井之口の右の考えは確かに一つの主張であるといえよう。

五来説は、鎮魂説というべきものである。肉体から分離したばかりの靈魂すなわち新魂は、浄化の儀礼を全くうけていない荒魂でもあるので崇りやすく、浮遊し荒暴化するまえにどこかに封じ込めることが必要だと信じられていた。この新魂（荒魂）の鎮魂のための一種の依代として設けられるのが枕飯だというのが、五来説なのである。⁽⁷⁾そのため死後できるだけ早く準備されなければならず、また、高く盛り上げたり箸を立てるなど依代らしい形状が必要であった。そして葬列で捧持され、墓に封鎖されてその役割はおわるわけである。ではなぜ枕飯が鎮魂の力を發揮するのかというと、井之口説と同じく、柳田の説く「米の力」への信念が背景をなしているといえよう。

筆者は五来説に魅かれるものであるが、鎮魂説を提唱した五来は、当然、魂呼び説を強く批判し

ている。しかし、この批判には誤解に基づくのではないかと思われる点もみられる。まず一点は、筆者が先に引用した井之口の主張を五来もそのまま引用し、「この所論ではまず枕飯を死体に供えるとかんがえているが⁽⁸⁾」として批判を展開しているが、ここで井之口は、枕飯を死体に供えると考えざる常識的な見解にむしろ異を唱えて自らの魂呼び説を主張しているのであって、五来の批判は当たらない。第二点は、魂呼びは死が確認されたから行う儀礼ではなく、肉体から靈魂の分離があつたから呼び戻そうとして行うのであつて（まだこの時には仮死でしかないとの考え）、戻らないと悟つたとき初めて死が確認されるのであり、魂呼びのなされているときの肉体は、儀礼執行者にとつてはまだ死体とはみなされていないのである。死が確認されるまでは、たとい肉体から分離した靈魂であつても荒魂とは考えずにひたすらさまさまな魂呼びがつけられるのであり、その一方法として米の力を信じ枕飯がこしらえられるのだというのは、考えとしてはなりたないわけではない。五来の殯について⁽⁹⁾の解釈はわからないではなく、また、蘇生をあきらめるまでの期間の考えには時代的変遷もあることであろうが、井之口も「風葬・火葬によつて骨化した遺骨の蘇生を待つ」まで魂呼びが継続されると極論しているわけではないのである。

ところで五来は、鎮魂説とからめ、枕飯に関して他に重要な指摘をしている。葬送儀礼に用意される飯には、枕飯の他に野飯・六道飯等と呼ばれる食品もあり、これらは死者の鎮魂用の枕飯とは異なり浮遊する餓鬼に供するためのものではないかと述べていることである。餓鬼への食物分与は井之口

も随所で触れていないわけではないが、⁽¹⁰⁾五来は葬送儀礼が対象とする靈魂には死者靈と餓鬼との二種があり、前者のための食物を靈供、後者へのを饗供と総称して、明確に区別して考えようとしている。筆者はこの見解を評価するが、五来は饗供を古代の道饗祭における鬼靈への饗過と関連づけ、さらに複雑な議論を展開させて二靈魂論を一靈魂論にまとめあげ、靈供と饗供は結局は一種であったと述べている。筆者にはここで五来の説く靈魂の一元論と二元論について詳細に論じる余裕はないので、靈供・饗供を明確に区別する見解に触発されたとだけ述べるにとどめ、以下、葬送儀礼における枕飯・枕団子を準備する意味について試論を展開してみたい。

二、各地の事例概観

先に、名称や作りかた・形状については触れたが、ここで各地の枕飯・枕団子の事例を簡単に追ってみたい。全国の実態を通観するために、二次資料ではあるが、明玄書房刊の資料集『各地方・各県』の葬送・墓制⁽¹¹⁾を用いることにする。

事例1 秋田県では、死後すぐに早団子と枕飯を作るが、両方とも急いで作る地域と、枕飯だけは葬式当日に用意する地域とがある。

事例2 宮城県では、死後すぐに粳米の粉で枕団子を作って死者の枕元に供え、葬式当日にはイッパイメシ（一杯飯）を別火で炊いて高盛りに盛り、箸を立てる。ともに葬列とともに墓地に持参される。なお、枕団子だけは初七日まで毎日作りつづけられることが多く、葬式以降の分は初七日の墓参りの際、墓に供えられる。

事例3 栃木県では、死後すぐに枕飯と枕団子を作る。枕飯は死者が生前使用していた茶碗に高く盛りつけ、中央に箸二本を立て、枕団子は米の粉で六個作って枕飯と並べて枕元に供える。

事例4 神奈川県では、死者を北枕に寝かせるなどのザシキナオシが終わると別竈で枕飯を炊き、死者が生前使用していた茶碗に高く盛り、箸を二本立て、ハタキゴメ（できのよくない米）で作った枕団子とともに枕元に供える。枕団子の数は地域によって一定しない。

事例5 新潟県では枕団子・枕飯ともに作るのが一般であり、葬列とともに墓へ運ばれる。両方とも死後ただちに作る地域も少なくないが、枕飯の方を枕団子より遅らせ、僧侶が枕経をあげるときとか葬式当日などに用意するのが一般的である。なお、佐渡地方には、枕団子を「イヌのパンバのダシゴ」と称し、野辺送りに際して道の辻々に置いていく例がみられる。

事例6 静岡県では、死者の枕元に枕団子・一膳飯等を供えるが、これらは別竈で用意し、飯の場合には死者が生前使用していた茶碗に山盛りにし、一本箸を立てる。

事例7 三重県では、死後すぐに別竈で枕飯を炊き、茶碗に高く盛って木と竹の箸を一本ずつ逆向き

に立てる。枕団子も作るが、枕飯の代わりにこしらえる地域と両方とも作る地域とがある。団子は玄米から作るので黒くなり、烏団子などと呼ばれる。

事例8 京都府では、枕膳と称するものに、死者の生前使用していた茶碗に盛った飯と土器に入れた玄米の団子などを載せて供える。

事例9 鳥取県では、死者の生前使用していた茶碗に飯を山盛りにしたものを枕元に供えるが、同時に米の粉の生団子を添えることも多い。

事例10 山口県では、死後すぐに枕元に茶碗に高盛りした枕飯が供えられる。クグの団子といって、茶碗の下半分に玄米の飯、その上に団子九個を盛ったものを作る例もあるようである。

事例11 徳島県では、死後すぐに（すぐにと言わない例もあるという）枕飯を炊くが、茶碗一つに高く盛って二本箸を立てて膳の中央に載せ、同じ鍋で炊いた残りの飯を四つに小さく握り分けて膳の四隅に置き、枕元へ供える。四隅の握り飯は、餓鬼に施すためとも言われている。

事例12 愛媛県では、枕飯は死後ただちに炊くべきだというが、枕飯とは茶碗に高く盛りつけ、その上に箸一本を突立てて膳の中央に置き、膳の四隅にオモリモノといわれる団子を一、二個ずつ置いたものである。これらは入棺時に棺に入れる例もあるが、多くは、野の飯といって墓地に運ばれる。

事例13 福岡県では、枕飯は死者が生前使用していた飯茶碗に高く盛りあげ、箸一本を立てたものである。全県下ではないようだが、これに野辺団子・送り団子などといわれる団子が一盛り添えられ

る地域もある。

事例14 熊本県では、死後ただちに枕飯が炊かれ、死者の用いていた茶碗に高盛りにして供えられ、箸が立てられる。このほか、通夜には、糯米の粉で団子も作られる。葬式のあと、その団子を子供に与える地域もある。

以上、東北から九州まで、一地方なるべく離れた二県ずつを取りあげてみた。各県とも地域によってさまざまなバリエーションはあるであろうが、右の通観によつておおよその傾向は知ることができ、次のことが確認できる。

① 枕飯と枕団子はほぼ全国的に両方とも作られているが、新潟県あたりから東北地方一帯にかけては死後すぐ用意するのは団子の方であり、飯の方は団子より遅れ、葬式当日などに作られることが多い。他のほとんどの地方では飯と団子をすぐ用意するが、団子は飯に従属するもののように考えられているかに思われる。

② 枕飯も枕団子も、葬列に組み込まれて墓地まで運ばれることではほぼ共通している。

③ 枕飯は茶碗に高く盛りあげてその上に箸を立てることではほぼ共通しているが、事例11のように、握り飯型の飯も枕飯の一部に含めている例があるのは注目すべきである。一方、枕団子は、資料への明記が少ないので確かではないが（従来の研究では枕飯に主力が注がれてきたため、枕団子の

報告は簡略になりがちであった、個数は地域によつてまちまちのようであり、かつ事例2のように初七日まで作りつづけられたり、事例5・7のように「イヌのパンバのダンゴ」「烏団子」という異様な名で呼ばれていたりというように、地域的にバリエーションがみられる。

各地には元来、死霊の觀念を背景にしたさまざまな儀礼があつたであろうし、その上に僧侶による仏教的・非仏教的解説も加わつて、葬送儀礼は全国的にみると相当に錯綜している。死霊や忌みの觀念の變化とともに、長い間には地域ごとの変貌も甚だしかつたと思われる。したがつて、①で述べたような、枕飯を中心と考え、それに枕団子を従属させるのが本来なのか、新潟県から東北地方一帯のようにまず枕団子をこしらえ、遅れて葬式当日に枕飯を作るのが本来なのかなどを論ずることは、困難である。ただ、こしらえるのが新潟県から東北地方一帯のように死の直後ではないという事例が少なくないとはいえ、枕飯はその形状からして、死霊を憑依させ鎮魂するために設けられるのだという五来重の考えは、承認されてよいであろう。それでは、もう一方の枕団子は何のために作られるのであるか。魂呼びい説をとるにせよ鎮魂説をとるにせよ、魂呼びや鎮魂をより徹底させるために両方を用意するのだとか、一方が行われているところへ他の方式が考案されたり伝播してきたためにために重層しているのだとかの解釈もできないわけではないが、説得性があるとは思えない。とはいえ、両方作られるのはそれだけの確かな理由があつたはずである。そこで次には、団子と形状的に類似する握り飯型の枕飯をも視野に入れながら枕団子関連の習俗をみ、その理由を考えていく。

三、施される枕団子

先に事例5で示した新潟県佐渡地方（両津市河崎）の、野辺送りで墓地へ向かう際に枕団子を「イヌのパンバのダンゴ」と称して辻々に置いていくという例は、興味深い。長崎県有喜町では、おそろく出棺時に会葬者用にこしらえたと思われる丸い握り飯をクドク・ホドコシといって葬列の途次人々に施したというが、同時に死者に供えられた団子も子供たちに与えられていた。⁽¹²⁾このような、野辺送りに捧持される枕飯・枕団子が途中さまざまな方法で分与されるという報告例は必ずしも多いわけではないが、分与される場合には枕飯という例はまずないといってよく、圧倒的に枕団子である（握り飯や餅という例もある）。なお、葬列途次ではなく、葬式が終了した段階で野辺送り前に子供たちによって奪い取られるのが是認されたり、野辺送り後に子供たちに分与される例もある。

青森県八戸市付近では、死後すぐに米一杯（二合五勺）を炊いて母指大の団子を多く作り供える（これは一杯団子といわれているが、同県野辺地地方ではこれを早団子という）。一杯団子は葬列とともに墓へ運ばれ、墓葬礼ののち、半紙一枚敷いて米・茶・水などとともに墓上に置かれる。これはあとで烏が食ってくれることを期待し、もし食わないで残っていると死人が続くといって気にしたという。⁽¹³⁾福島市の茂庭では、死者の出た翌日、六合の米をとがずに炊き、ログゴ団子というものを六個作って三

室に載せ、死者の枕元に供える。これは団子とは呼ばれているが、握り飯であるらしい。ログゴ団子の残りの飯をリキの飯（盛りきりの意カ）と¹⁴いって死者生前使用の茶碗に盛り、箸を一本立てて同じく枕元に供える。これらは葬列とともに墓地に運ばれ、そこでは早く烏や犬に食われてなくなるとよいと考えられている。¹⁴鳥取県の若桜町柘原では、シカノダンゴ四十九個を四本の竹串に刺して死者に供され、あとで枕飯と一緒に墓に置かれるが、この団子は烏などが早くとって食べてくれると死者が成仏したと¹⁵いって喜ぶという。このように、葬列に組み込まれて墓地に運ばれた枕飯・枕団子が墓上に置かれ、犬・烏・野狐などに早く食べられることを期待する例は枚挙に遑がないほど多い（この場合にも、枕飯よりも枕団子についていう例の方がはるかに多い）。

先に述べた葬列途中で辻々に置かれたり人々に分与される例も含め、とにかくこれらの事例は、枕団子とは、死者の枕元に置かれながらも結局は餓鬼・無縁のような他の何かに食べさせるべきものと考えられていたことを物語るものではないだろうか。その点、岩手県の海岸地方で枕団子を「サバの団子」と呼んでいるのは、¹⁶気になる事例である。

また、枕元に供えられたものかどうかは定かでないが、熊本県宮地町地方（現・阿蘇郡一の宮町）では、うるし米（粳米カ）の粉で固く作った団子（野辺送りの団子という）を重箱に入れ、蓋もせず組内の人が葬家より葬列に加わって墓地に持って行き、埋葬後、これを食べれば死人がオズクナイとい¹⁷って一同でことごとく食べてしまうという（もし残ればそこに捨ておく）。このような事例も各地に少

なくなく、死者との食い別れという解釈がなされがちであるが、わざわざ粗末な団子を重箱に蓋もせず運んでいることからみても、組内の人々が餓鬼を演ずる形で食し、ひいては死者の供養をしているのだと解すべきであろう。

このような枕団子には特別な力があると信じられていた。神奈川県津久井郡地方の枕団子は米飯をまるめたもの六個、もしくは洗米を内庭に梯子を逆さにかけて白を左に廻してひいた粉でこしらえた団子だったというが、これを食べると度胸がよくなると信じられていた。⁽¹⁸⁾ この度胸がよくなるというのがもつとも一般的な伝承で、あとは力持ちになれるとか淋しい気持ちになるとか、逆に淋しい気持ちからまぬがれるとか、さまざまにいわれていた。新潟県佐渡郡河原田町（現・佐和田町）で、長生きした死者への枕団子は、高齢にあやかりたいとのことで十六個を何度作って供えても人々に取られてしまうといわれていたのも、やはりその力が信じられていたからであろう（同時に、誰かに取られたり食べられたりすることが許容されていたことにも注目すべきである）。この特別な力を信じる背景には、今までにも触れ、また次にも述べるように、枕団子が本来、餓鬼の食すべきものであったとの心意が隠されているものと思われる。

大阪府では、枕飯のみを作る例もあるが、枕飯・枕団子両方をこしらえるほうが多く、この場合、枕飯が野辺送りの際に墓地まで運ばれるのに対して、枕団子は、枕飯と一緒に墓地まで運ばれることもあるが、野辺送りの途中に川へ流しやるとか餓鬼に与えるという例もみられる。⁽²⁰⁾ ここで明確に餓鬼

を意識しているのは、注目すべき伝承である。

枕団子とは報告されていても、実際には米飯を握った球形の握り飯であることもあり、飯とはいえないような握り飯は、茶碗に高盛りにした枕飯とは明らかに異なっている。大阪府や奈良・和歌山両県には、死後すぐにとか、七日目あるいは四十九日目までにとか、いずれにしても死からそれほど期日をへだてずに高野山に死者の骨あるいは毛髪・爪などを納めにくく習俗があり、コツオサメ（骨納め）・コツノボセ（骨上せ）などと呼ばれているが、このとき、握り飯持参で行く例が多い。持参する理由として大阪府河内長野市では、途中でダリ（餓鬼）に憑かれて身体がだるくなるので、そうなたとき飲み水とともにダリに握り飯を与え、自らも食べるためだといっている。⁽²¹⁾この説明は一般的であるが、女人堂で犬に食わせてくるというのものもある。死者の枕元に供えられていた握り飯というわけではないが、高野山への死霊送りの途次、集い寄ってくる餓鬼に握り飯を与えて霊送りの目的を果たそうとする心意は、野辺送りの途中に餓鬼に枕団子を供しようとする心意に通じるものといえよう。

このようにみえてくると、出棺時に餅や銭を撒き投げて参会者に拾わせるのも、米を撒くのも、本来はやはり、これから始まる野辺送りを安全に遂行するために、まず餓鬼に供しておこうとする心意に支えられた行為だと考えられる。また、葬列が花籠を振って米・銭を撒きつつ墓地へ向かうのも、花籠そのものの意味はまた別に考えるべきだとしても、撒く行為は餓鬼へのためであつたといえよう。⁽²²⁾

以上によって、枕団子が作られるのは、餓鬼への供え、換言すれば施食のためであることがわかつ

た。不気味な墓地に餓鬼・無縁が蟠踞しているのではないかと考えるのは、自然の感情である。同時に、死霊送りである葬列（野辺送り）にもそちこちから餓鬼どもが寄り集まってくると考えられていた。死体を奪おうとするカシヤ（火車）の噂が多く、実際に奪われたとの話さえ伝えられているのである。⁽²³⁾ これらの難を回避して墓地への死霊送りが恙なく果たされ、墓地での死霊の安全が確保されるためには、まずそれら餓鬼・無縁に食物を施与し、供養ないし祀りのなされることが必要だったのである。

それでは、出棺のときでなく、なぜ死後ただちに準備されねばならないとされていたのか、また、同じ枕元に供えられる枕飯と枕団子の関係はどうなのかについて、次に考えてみよう。

四、枕飯に配される団子・握り飯

枕飯と枕団子に関し、四国地方一帯には興味深い伝承が多い。

事例15 愛媛県北宇和郡の山間部では、死者がでるとただちに親族以外のものがノメシ（野飯）といって二合半の飯を炊き、死者が生前使用していた茶碗に盛って膳の中央に据え、残りの飯で球形の握り飯を四個作って膳の四隅に置いて、死者に供える。これらは野辺送りの際に墓地に運ばれるが、

茶碗盛りの飯だけ棺の上にあけ、四個の握り飯は餓鬼仏に与えるのだといって四方に投げつける。⁽²⁴⁾

事例 16 高知県幡多郡地方の枕飯は、膳の中央に茶碗に盛った飯を置き、膳の四方に団子や団子の代わりに握り飯を配した形のものが多い。盛り飯には箸を立てたり、また、中央に盛り飯と団子とを置き四隅には握り飯と花を配した形のものもあり、同じ地方でも細部にわたれば微妙な相違をみせている。しかし、高盛り飯を膳中央に据え、同じ膳の四隅などに団子か握り飯(団子・握り飯両方の場合もあり)を置くという点では一致している。そして、これらは埋葬時に四隅に投入される⁽²⁵⁾(報告例には明記されていないが、握り飯もしくは団子だけが投入されるようである)。

事例 17 香川県長尾町多和では、死後すぐに一合の枕飯を炊いて茶碗に盛って枕元に供え、また米一合を粉にひき、枕団子(もしくはロクドノダンゴ)といつて団子六つを作つてサンヤ袋というものに入れてゐる。同じ横川では、この団子は十二作つて六個をサンヤ袋に入れ、あとの六個は引導渡しがすむとその場所で四方に投げるといふ。⁽²⁶⁾

右の諸事例と先に挙げた事例 11・12 から、四国地方の多くの地域では、枕飯と枕団子(あるいは球形の握り飯)はともに死後すぐに作られ、両者はあとで葬列とともに墓地に運ばれる点まではほぼ同じであることが確認できる。異なるのは、枕団子(握り飯)だけが埋葬後いわば荒々しく四方に投げ撒かれるようにされることが多い点である。そしてこれら枕団子(握り飯)は、確実に餓鬼に与える

のだとさえ考えられている例があるのである。なお、香川県各地では枕団子のみ葬式当日に作る地域が少なくないなど、作る日時に両者差をつけている例も決して少なくないが、また同じとしている例も少なくないわけである。

注目すべき点はほかにもある。一つは、膳の中央に茶碗に高く盛り上げた飯を据え、同時に同じ膳の四隅に枕団子（握り飯）を配している点である。これは、餓鬼に供せられるものだと解釈が可能な枕団子（握り飯）が、死霊鎮魂用と解される枕飯（高盛り飯）と同時に枕元に置かれているわけで、餓鬼への施食が死後早速になされねばならないと考えられていたことを意味していよう。二つ目は、枕団子と握り飯は資料上錯綜しており、この場合結局、枕飯（高盛り飯）に配されるのは、球形という形状が相似ていれば団子でも握り飯でも食品の種別には拘泥しないということであろう。このことは、四国地方以外の枕団子と握り飯の関係についても言えるはずである。

おわりに

枕団子を含め枕飯を、死者鎮魂用の霊供と浮遊する餓鬼への饗供とに分けようとしたのは、五来重の卓見である。小稿も五来の考えに触発されているが、五来は饗供を、その主張の端(27)ばかりから判断するに、どうも葬式当日に作られ葬列に組み入れられて墓地に運ばれる食品に限定しようとしているか

に思われる。枕団子を饗供に含めているのも、資料を示しつつ握り飯を饗供だと解しているのも正当であるが、これらが死後すぐにこしらえられることをもつと重視すべきであった。

枕飯（高盛り飯）と枕団子（球形の握り飯を含む）は二者択一の食品ではなかった。各地の事例にはすでに相当曖昧になるか錯綜したものになってしまっているものが少なくないが、それでも、全国的には、両者ともにすぐ準備すべきだとする考えが大勢を占めているのである。野辺送りの際や埋葬地において餓鬼・無縁等に供されるべき枕団子（握り飯）が、死後すぐに枕元に置かれていることは、とりもなおさずその時点ですでに餓鬼・無縁等への祀り（施食と言ってもよい）が開始されていることを意味しているよう。

したがって、死者の枕元に金物を置いたり埋葬地周辺を狼ハジキ等で囲んでさまざま邪霊を防遏しようとするのと並行し、わが国の葬送儀礼においては、死後すぐに施食という方法で餓鬼・無縁等（これらも邪霊である）を祀ることによつてはじめて、死者霊への対応（五来説によれば鎮魂）が恙なく実施されうると考えられていたのだといえる。⁽²⁸⁾この考えは、冒頭で述べたような、雑神への供饌が滞りなくなされることによつて主神への祀りが恙なく成就するのだという、日本の祭りの構造に通じるものである。

- (1) 拙稿「祀りを乞う神々―雑神への供饌・供養と祭りの成立―」(『国学院雑誌』九四―一一)、拙稿「厄神の祭祀と正月行事」(『成城文藝』一六一)を参照いただきたい。
- (2) 井之口章次『仏教以前』古今書院 昭29・11 一四九―二五四ページ。
- (3) 五来重『葬と供養』東方出版 平4・5 IV―三「靈供」。
- (4) 前掲註(2)同書 六一―六二ページ。
- (5) 『定本柳田国男集』一四 二四〇―二五八ページ。
- (6) 前掲註(2)同書 四〇―四一ページ。葬送儀礼のなかに米の靈力への信念がみられることについては、前掲註(3)同書や、新谷尚紀『日本人の葬儀』(紀伊國屋書店 平4・7)のI―二章「米の靈力」など、多くの葬送習俗研究書に指摘されている。
- (7) 前掲註(3)に同じ。
- (8) 前掲註(3)同書 八八八ページ。
- (9) 前掲註(3)同書 I「葬法論」およびIV―「通夜」。
- (10) 前掲註(2)同書 一四三ページなど。
- (11) 『北海道の葬送・墓制』(昭54・6)、②『東北の葬送・墓制』(昭53・10)、③『関東の葬送・墓制』(昭54・3)、④『北中部の葬送・墓制』(昭54・3)、⑤『南中部の葬送・墓制』(昭54・3)、⑥『近畿の葬送・墓制』(昭54・6)、⑦『中国の葬送・墓制』(昭54・2)、⑧『四国の葬送・墓制』(昭54・7)、⑨『九州の葬送・墓制』(昭54・4)、⑩『沖縄・奄美の葬送・墓制』(昭54・3)。
- (12) 前掲註(11)の⑨同書 一三〇ページ。
- (13) 『旅と伝説』六七(誕生と葬礼号) 三三―三五ページ。

- (14) 『福島の民俗Ⅱ(『福島市史』・別巻Ⅳ)』 福島市教育委員会 昭55・3 二七八ページ。
- (15) 前掲註(11)の⑦同書 一二ページ。
- (16) 前掲註(11)の②同書 五二ページ。
- (17) 前掲註(13)同書 一八〇ページ。
- (18) 前掲註(13)同書 八三ページ。
- (19) 前掲註(13)同書 五三ページ。
- (20) 前掲註(11)の⑥同書 一七六一―一七七ページ。
- (21) 『河内長野市史(第九卷・別編Ⅰ・民俗の部)』 昭58・3 三〇七ページ。
- (22) 前掲註(3)同書 Ⅱ―二『葬送幡と天蓋』。
- (23) 『宮崎県史・資料編・民俗2』 宮崎県 平4・3 三〇八ページ。
- (24) 大間知篤三「シニベントー」(『民間伝承』二二三)。
- (25) 高木啓夫「幡多葬送習俗・上」(『土佐民俗』二二・一三合併号)。
- (26) 武田明「マクラメシとマクラダング」(『香川の民俗』四八)。
- (27) 前掲註(3)に同じ。
- (28) なお、前掲註(6)の新谷尚紀『日本人の葬儀』には、野辺送りに際し、誰かが出棺より一足先に米銭や着物などを持って出て墓地に運んだり途中の木に吊り下げる、秋田県のアトミラズ習俗に言及し(同書四五一―四八ページ)、これは、「葬列によつて遺体は送り出されても霊魂はそれとは別なのであり、遺体だけ処理しても霊魂はそれと一緒に処理されるわけではないのだとする観念の独特な儀礼的表現ではないか」(五九ページ)と述べているが、アトミラズも、小稿で述べたように、葬送儀礼の主たる対象である死者霊の祭祀に支障をきたさないことを願い、それに先だつてなされる邪霊供養の一種だと解すべきであろう。